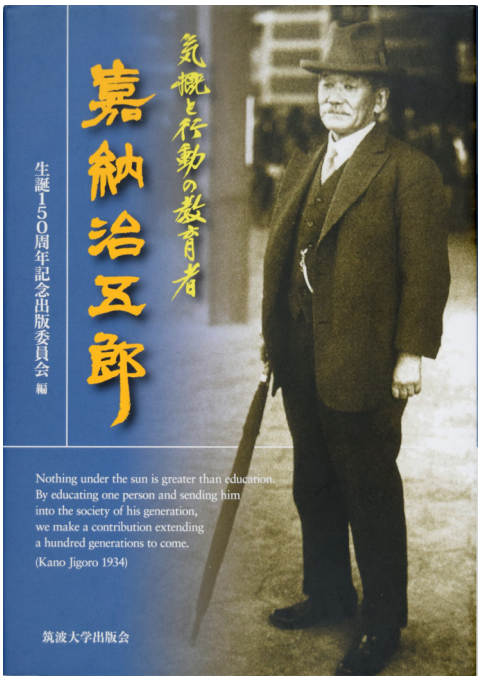
小特集 ◆ アスリートの肖像

令和二（二〇二〇）年は、五六年ぶりに東京でオリンピック競技大会が開催され、本学と縁の深いアスリートの活躍が期待されています。また、一月に開催された第九六回東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）には、本学の学生アスリートたちが健闘する姿を二六年ぶりに見ることができました。小特集では、筑波大学附属図書館に所蔵される資料から、過去のオリンピックや箱根駅伝で活躍した本学前身校のアスリートたちを紹介します。あわせて『令和元年度筑波大学附属図書館特別展～東京一九六四と日本文化について考える～』の図録・電子展示もぜひご高覧ください。



1 嘉納治五郎：気概と行動の教育者

生誕 150 周年記念出版委員会 [編] 筑波大学出版会 平成 23（2011）年刊

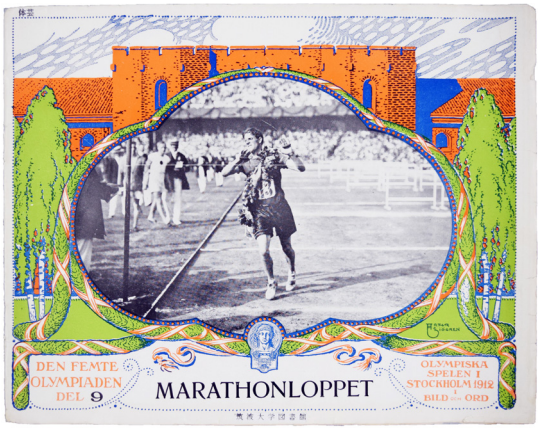
本書は、柔道の創始者として一般にも知られる嘉納治五郎の実像を紹介する。嘉納は、明治～大正期の教育改革にも貢献した東京高等師範学校長である。運動部・文化部などの課外教育、中等教育、教員養成、留学生教育など、新たな教育施策を取り入れ、教育改革を推進した。IOC 委員として、幻に終わった昭和 15（1940）年東京オリンピックの招致に貢献したことは、令和元年の NHK 大河ドラマ『いだてん：東京オリムピック噺』によって、いっそう知られるようになった。 〔請求記号 中央 789.2-Ka58 他／筑波大学出版会図書〕

© Committee for the Commemoration of the 150th Anniversary of the Birth of Jigoro Kano, 2011

2 つくばスチューデンツ 第 624 号

筑波大学学生生活支援室 [編] 筑波大学学生生活課
平成 23（2011）年刊

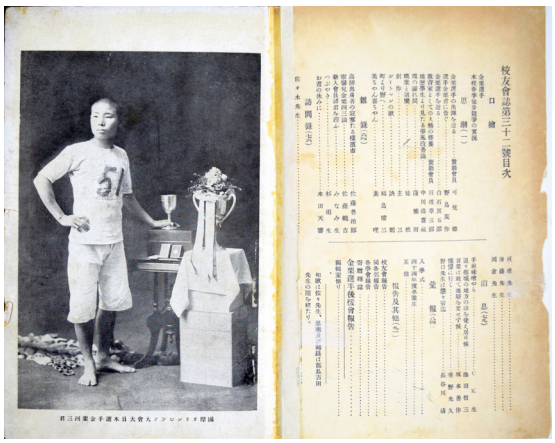
本学の学生向け広報誌（現在休刊）。表紙写真の「嘉納治五郎先生之像」は朝倉文夫制作で、平成 22（2010）年 12 月に嘉納の生誕 150 年を記念して筑波キャンパス大学会館前に建立された。その原型は昭和 10（1935）年に嘉納の喜寿記念として作成された。その翌年に旧東京文理科大学本館前へ建てられた最初の像は戦時中に供出の憂き目にあったが、戦後にはこの像のほか、本学東京キャンパス占春園（昭和 33（1958）年）、講道館（昭和 35（1960）年）、兵庫県神戸市の灘中学校・高等学校（平成 24（2012）年）、台東区（平成 31（2019）年、区立朝倉彫塑館収蔵）の像が同じ原型を用いて製作された。 〔中央／本学関係資料〕



3 Marathonloppet：Den Femte Olympiaden del 9：Olympiska Spelen i Stockholm 1912 i Bild Och Ord

Göteborg：Åhlén & Åkerlunds Förlag　Stockholm：Jacob Bagges Söners　1912（明治 45）年刊

スウェーデンのストックホルムで開催された第 5 回オリンピック競技大会のマラソンに関する記録。本大会は、日本がアジアの国からはじめて参加した記念すべき大会である。その選手こそがマラソンの金栗四三（かなぐりしそう）と陸上競技（短距離）の三島弥彦（みしまやひこ）であった。金栗は嘉納治五郎が校長を務める東京高等師範学校の生徒であり、後にマラソン用の金栗足袋を考案したり、高地トレーニングを導入したりするなど日本マラソン界の発展に大きく貢献した「日本マラソンの父」である。　〔請求記号 体芸 780.69-Ma51〕



4 校友会誌（こうゆうかいし） 第 32 号

東京高等師範学校校友会　明治 45（1912）年刊

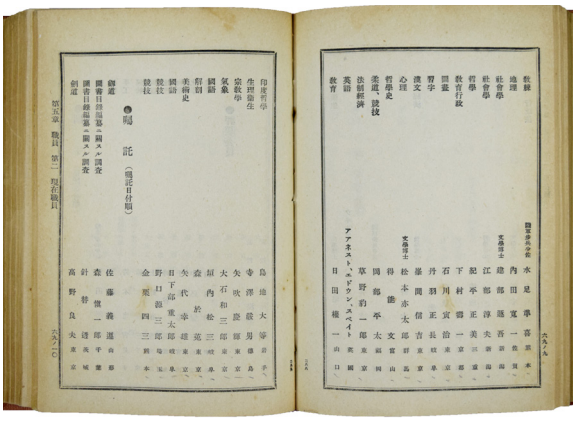
東京高等師範学校長嘉納治五郎による校風整備の一環として発行されるようになった出版物。本号はストックホルム・オリンピック競技大会に出場する金栗四三壮行の特集号で、巻頭グラビアには金栗の肖像写真、本文には可児徳（かにいさお）「金栗選手の出陣を送る」、野島茂作（のじまもさく）「金栗選手に寄す」、「金栗選手後援会記事」が載る。〔中央／本学関係資料〕

5 校友会誌（こうゆうかいし） 第 34 号附録（ふろく） 金栗選手後援会報告（かなぐりせんしゅこうえんかいほうこく）　東京高等師範学校内 金栗選手後援会　大正元（1912）年刊

金栗四三がオリンピックに出場する東京高等師範学校では、峯岸米造（みねぎしよねぞう）を会長とする金栗選手後援会が組織された。同会への寄附金は 2000 円 35 銭 1 厘に及び、練習費・送別費・旅費・通信費・歓迎費などに充てられた。この報告書には、金栗が著した「国際オリンピック大会参加の記」や、符（プラカード）をもつ大役を任せられた開会式入場行進の写真も載る。〔中央／本学関係資料〕

7　Programme Officiel : VIIe Olympiade Anvers 1920　　[Anvers] : [s.n.]　[1920（大正 9）年刊]

大正 9（1920）年の第 7 回アントワープ・オリンピック（ベルギー）の公式プログラム。開会式では、東京高等師範学校の卒業生・嘱託で、後に東京教育大学東京高等師範学校名誉教授となる野口源三郎が日本選手団の旗手を務め、また、十種競技に出場した。野口は、在校中に嘉納治五郎に見そめられてストックホルム・オリンピック予選会に出場していたが、大会本番での金栗・三島の惨敗に刺激され、本格的にアスリートへの道へと歩みを進めた。　〔請求記号　体芸／ 780.69-P94〕



6　東京高等師範学校一覧（とうきょうこうとうしはんがっこういちらん）：自大正 9 年 4 月至大正 10 年 3 月　　東京高等師範学校　大正 9（1920）年刊

本書に野口源三郎（のぐちげんざぶろう）と並んで東京高等師範学校講師として名前が見える金栗四三は、駅伝の起源とされる大正 6（1917）年の東海道駅伝徒歩競走で関東組アンカーとして出走したことでも知られる。また、同窓の野口、明治大学の沢田英一（さわだえいいち）とともに大正 9（1920）年 2 月 14・15 日の第 1 回東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）開催にも尽力した。その優勝校となった東京高等師範学校は、同じく第 1 回出場校の明治大学・早稲田大学・慶應義塾大学とともにオリジナル 4 と通称される。本学の出場は本年で 61 回目、筑波大学としての出場は 15 回目にあたる。

〔請求記号　中央ホ 190-294 ／本学関係資料〕

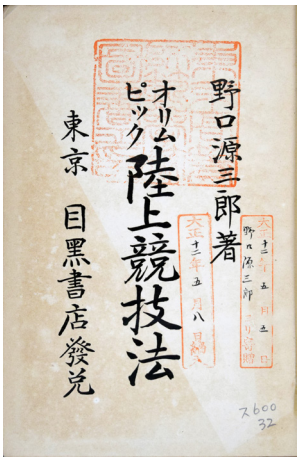
（参考）野口源三郎と教え子たち　『卒業記念』（東京高等師範学校、1936 年 3 月。個人蔵）より

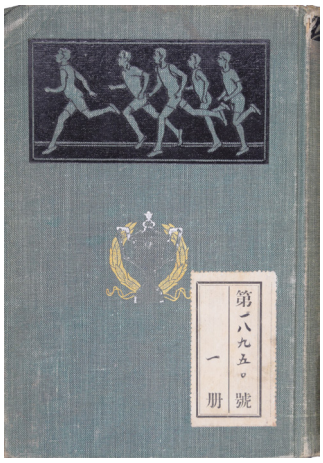
8 オリムピック陸上競技法

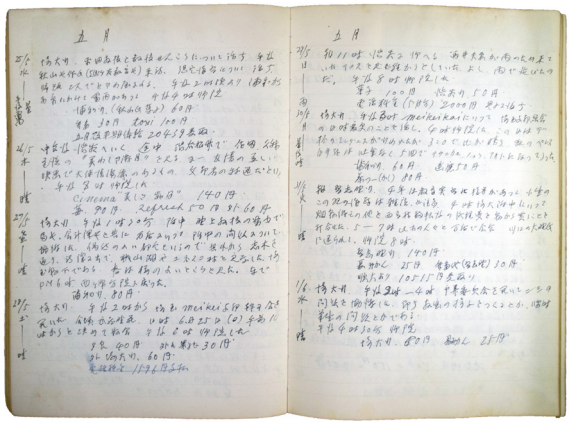
野口源三郎［著］目黒書店　大正 12（1923）年刊

野口源三郎が著した陸上競技の学習参考書。野口は教育者・指導者としても活躍し、陸上競技の普及にも尽力した。自身が本書を携えて各地の講演会・実技指導を行った。本資料は写真が豊富で、初心者にもわかりやすい解説書である。中等教育学校の教員資格試験（文検）の学習参考書として購入されたと言い、28 版を重ねたが、展示資料は初版本である。

〔請求記号　中央／ス 600-32〕



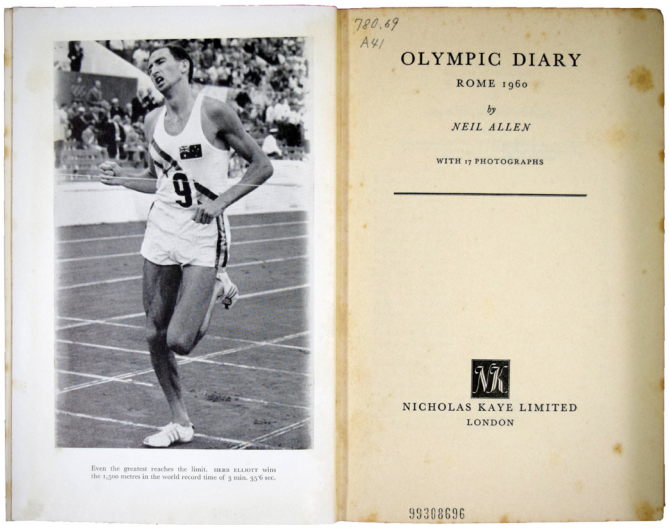


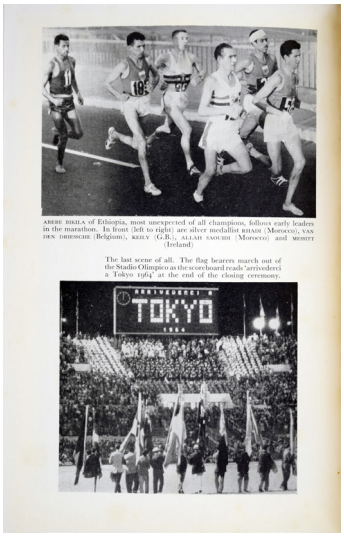


9 ［日記帳］　野口源三郎［著］　昭和 30（1955）年

本学には、野口源三郎が昭和 22（1947）年から同 42（1967）年に記した自筆の日記帳のうち 12 冊が寄贈されており（野口源三郎手稿コレクション）、本資料はそのうちの 1 冊。東京教育大学体育学部・東京体育専門学校を定年退職した後に勤めていた埼玉大学・順天堂大学の教授として、また、陸上競技各種団体の重職として、後進の育成に邁進していた様子がうかがえる。

〔請求記号　中央和装 780.8-N93-1955〕





10 Olympic Diary：Rome 1960　　by Neil Allen　London：N. Kaye　1960（昭和 35 年）刊

昭和 35（1960）年にイタリアのローマで開催された第 17 回夏季オリンピック大会の記録出版物。このとき日本選手は体操の 4 種目で金メダルを得た。その金メダリストには、本学前身校である東京教育大学で学んだ小野喬（おのたかし）（男子跳馬・男子鉄棒・男子団体総合）、遠藤幸雄（えんどうゆきお）（男子団体総合）、三栗崇（みつくりたかし）（男子団体総合）がいた。小野は体操男子個人総合で銀メダル、男子つり輪・平行棒で銅メダルも得ており、4 年後の東京オリンピックでも活躍した。

〔請求記号　体芸 780.69-A41〕

筑波大学附属図書館常設展解説シート「小特集　アスリートの肖像」

解説執筆　山澤　学（附属図書館研究開発室員・人文社会系准教授）
令和 2（2020）年 2 月 12 日　　編集・発行　筑波大学附属図書館研究開発室「附属図書館における貴重資料の保存と公開」プロジェクト